

最後のチャンスにかける思い

「ルワンダでは男の子も女の子も丸刈りです」

机に並べられたたくさんの写真に、生徒たちの視線が一斉に集まる。「あつた!」「これだ!」。勢いよく手を伸ばした先にあるのは、髪を短く切った子どもたちが肩を組んでいる写真だ。ここは、岩手県立杜陵高校奥州校。生徒たちが熱い戦いを繰り広げているゲームの名は、「ルワンダかるた」だ。

「ルワンダでは、多くの子どもが毎日お風呂に入れないので、皮膚病の予防のために髪を短くしているのです」。生徒たちに語り掛けているのは、ルワンダかるたを発売した、定時制1年次主任の菊池尚子先生だ。農作業を手伝う子ども、色鮮やかな伝統の籠など、ルワンダで撮影された全部で30種類の写真がかかるたの取り札となり、菊池先生は、その一枚一枚についてエピソードを紹介する。ただ遊ぶだけでなく、現地の生活や文化を楽しみながら学ぶことができるのだ。

菊池先生が、ルワンダかるたを授業に取り入れるようになったきっかけは、毎年夏に実施されるJICAの教師海外研修だ。以前から興味はあったものの、育児などに追われてなかなか参加することができなかった。しかし、年齢制限となる50歳を迎えた昨年、最後のチャンスに思い切って飛び込むことを決意。その裏には、常々抱えていたある思いがあった。「この学校は中学時



世界とつながる教室

ルワンダかるたに初めて挑戦する1年次の生徒たち。みんな真剣な表情をしている

楽しみながら世界を知る

岩手県内にある定時制高校、県立杜陵高等学校奥州校。この学校では、アフリカの国ルワンダを題材にした“かるた”を授業に取り入れている。生徒たちからの人気も高いユニークな授業の狙いとは一。



connect with
Rwanda
ルワンダ



取り札の写真は、教師海外研修に参加した先生たちが協力して撮影したものだ

代に不登校だった生徒が多く、中には将来の夢を持ってない生徒もいます。だからこそ、私が海外に行くことで、やりたい気持ちがあれば何だってできる、ということをお伝えしたのです」。

帰国後、ルワンダかるたは生徒たちの間で人気を集め、学校の名物授業となった。そして今年5月、新しく入学した1年次の生徒たちが、初めてルワンダかるたに挑戦することになった。ゲームが始まると、たちまち教室中には楽しそうな声が響き渡る。自転車のタクシーがあること、重い荷物は頭に掛けて運ぶこと、一冊の教科書を2人で一緒に使うこと。それまで、ルワンダという国がどこにあるのかも知らなかった生徒たちが、かるたを通じてさまざまな知識を深めていった。「タンクを持って水汲みをする子どもの写真を見て、水道がない家があることにびっくりした」と話すのは、高野拓実くん。千葉麻衣さんは、「募金やボランティアをしたい」と話してくれた。

授業のあと、「最後にぜひ会ってほしい人がいる」という菊池先生について行くと、4人の生徒が出迎えてくれた。昨年、菊池先生が英語の授業を担当した3年次の生徒たちだ。4人が手にしていたのは、英語で書かれた手紙。実は、菊池先生は研修の際に、生徒たちが英語で書いた手紙を現地の高校に届け、そこで学生から返事をもらって帰ってきたのだ。どんな楽器があるのか、アイスはありますか、趣味は何か。そんな質問に一つ一つ答えてくれたという。「海を越えてつながっている感じがした」とうれしそうに話す石川優花さん

は、「ルワンダの学生は、ものを大事にしながら勉強に励んでいるという話を聞いて、私もがんばらなければと思った」と意気込む。菊池先生に何度も添削してもらいながら手紙を書いたという高橋悠くんも、「いつか海外に行ってみたい」と夢を語る。4人の表情は、やる気に満ちていた。

「さまざまなことに興味を持ち、知らないことがあれば自ら調べるようになったことが大きな変化です」と、菊池先生も生徒たちの成長ぶりを実感している。そんな先輩の背中を追う今年の新入生たちにも、ルワンダの明るい面だけでなく、紛争や虐殺などの歴史についても、これから少しずつ伝えていきたいという。「みんなが自分の特性を生かして、いろんな分野で活躍する可能性を秘めています。私は自分の経験を伝えることで、その種まきができればと願っているし、それが使命だと感じています」。



ルワンダの小学校で、児童と一緒にソーラン節を踊った菊池先生(昨年8月)

一人の先生の熱い思いが、生徒たちに一歩を踏み出す勇気を与えている。

授業ではルワンダの衣装を身に着け、気分十分だ



ルワンダの高校生からもらった手紙を手にする3年次の生徒たち